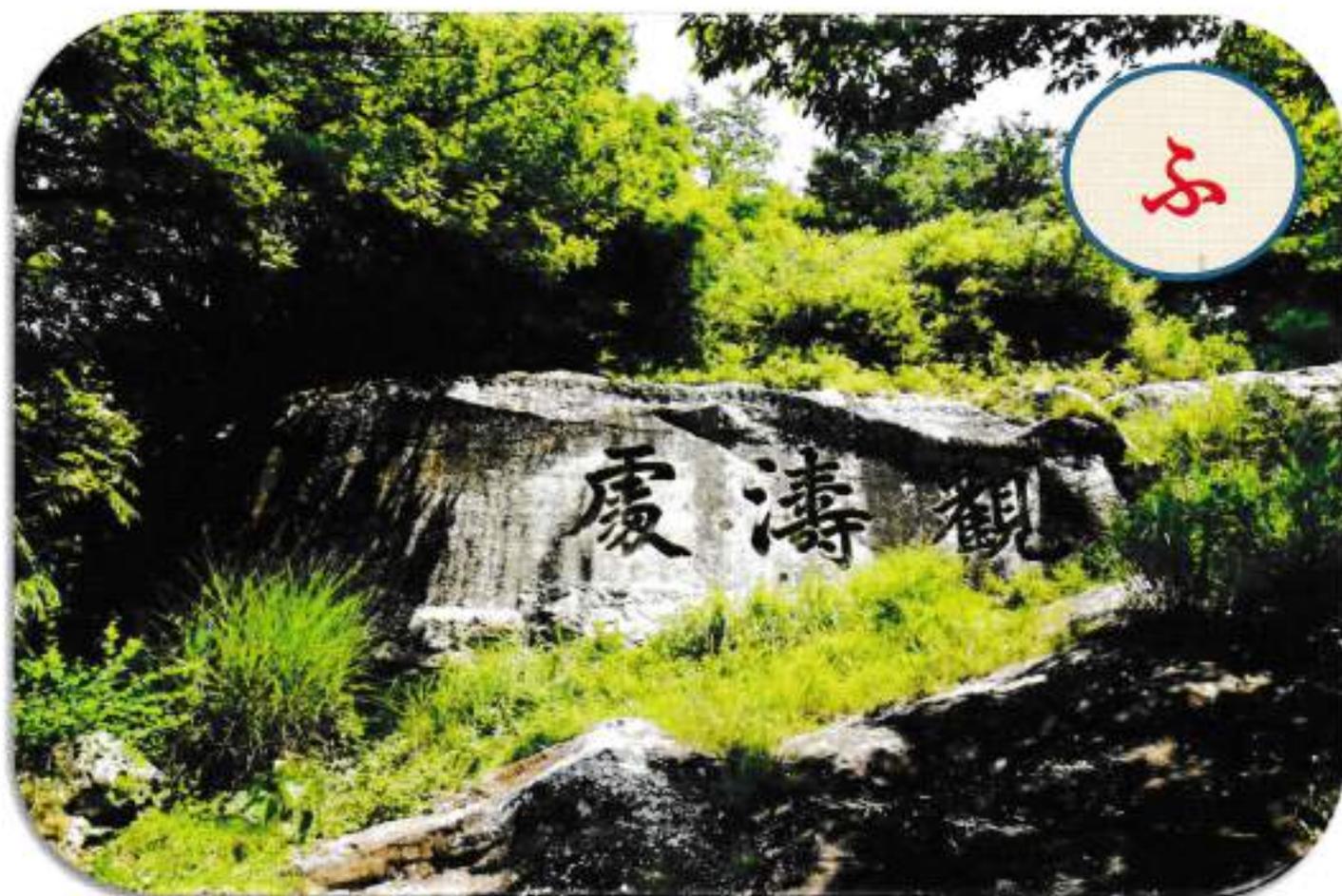


塩市ルートのかるた 紹介
史跡かるたのウォークを楽しむ！

” かるたの流れ ”

あぬやけ み2ほは うよふか そらのい



石の宝殿研究会



石の宝殿研究会 HP

県指定文化財「天磐舟」

家形石棺蓋石 杉柱前 青根町教育センター



あ

阿弥陀院町生石教育センター



「播磨名所遊覧図説」の

「石舟の墳」では古代の石槨の蓋

播磨

う



加古川



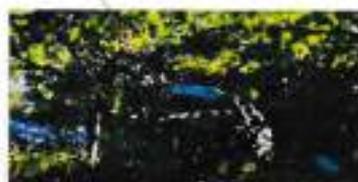
「血の池」と地元の人が呼ぶ溜まり

願

か



受験生 願掛けの穴場



観瀆処 右側 “落ちない岩”

あ

あま いわつかね
天の磐舟

にしん こうりん
二神が降臨

いは やま
伊保の山

う

うた ことば
魚崎構居に

た おも
立てば想う

もの の 心の影

か

がくせい
学生の

べんきょうあとお
勉強後押し

むす いわ
お結び岩

あ意味

天の磐舟は大穴牟遲神、少名毘古那神の二神が天津神の命で国土を経営するため伊保山に降り立った時の乗り物との伝説がある。

全長約 2.7m、幅約 1.4m、高さ約 0.7m 有り。大きな 6 個の突起がついている。

発見場所は伊保山(112m)の頂上附近。これは、竜山石製の「家形石棺の蓋」なのです。6 世紀の後半に製造されたと推定されている。

※高砂市教育センターの中庭に保存
(播磨山谷川沿い)

う意味

竜山の頂上は、位田長兵衛のお城(館)があった。すぐ西の方には、当時の侍が討ち死にしたとの言い伝えがある「血の池」の跡が残る。

ハイキングで登ったときには、下界を見下ろして静かに戦国時代を偲ぼう。

※魚崎構居の城主は嘉吉元年(1441)には和田兵庫介頼忠であったが、その後は天正六年(1578)には志方の真城として放棄されるまでは位田長兵衛が城主であった。

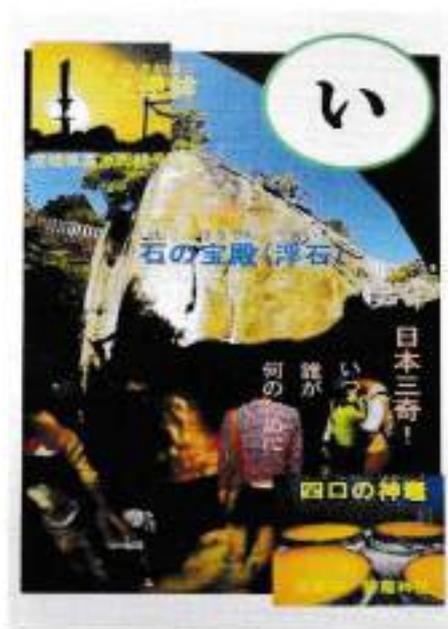
(日本城郭大系 12 巻より)

か意味

観瀆処の三大文字の右横にある“おむすび形の丸い石”は、落ちそうで落ちない不思議な石です。

若い書家 永根文峯の観瀆処とかけて 落ちない石ととく その心は どちらも敢闘(かんとう)したでしょう。

いまや、受験生が合格祈願に訪れる願掛けの聖場となっている。



石^{いし}

・鉄^{てつ}

・銅^{どう}

謎^{なぞ}の伝説^{でんせつ}

日本^{にほん}の三奇^{さんき}

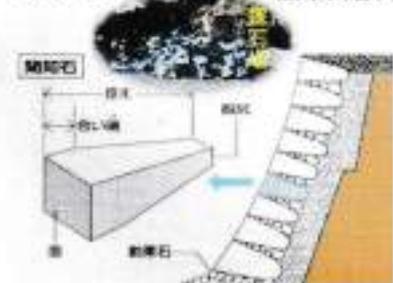
①意味

宝殿山(標高 65m)の中腹に、石の宝殿と呼ばれる謎の大石があり、生石神社のご神体として祀られている。この石の宝殿は、誰が、いつ、何のために造ったか、よくわからない、謎を秘めた不思議な遺跡である。

特に宮城県の大崎神社にある「四口(はんく)の神籠(しんかま)」、宮崎県の霧島東神社 高千穂山にある「天之逆鉾」、それに生石神社にある「石の宝殿」の浮石を加えて、日本三奇と数えられている。



播磨灘へ 法華山谷川



間知石 (Gojo 辞書より)



〈高砂の文化財「美術編」より〉

かもしろうはく
加茂御祖神社

かもしろうはく
曾我蕭白の奉納絵馬



播磨一の彩り

〈塗り絵より自然より〉



けんちいし
間知石
はしは
運ぶ
すいろ
水路は
ほっけ たにがわ
法華の谷川



そがしろうはく
曾我蕭白が
えまほうのう
絵馬奉納の
かもしんじや
加茂神社



ぬいす
塗り絵より・油絵よりも
あひ
鮮やかな
たつやまこうよう
竜山紅葉
ハゼ・ウルシ

け意味

竜山採石場は加古川本流であった法華山谷川(洗川)の豊かな水量に恵まれ石材の運搬に好都合だった。

石積みを使用される四角錐形の石材で底面が表に出るように積み、石垣、護岸、擁壁(ようへき)などに日本では古くから用いられている

石垣用の間知石、基礎に使う延べ石等沢山の石が長い年月を懸けてここから積み出された。

そ意味

神社の蔵から希代の画家曾我蕭白の名前が書かれた人馬の絵馬が発見された。伊保の真浄寺あたりを、今も「加茂条」と呼ぶ人があるが、加茂神社は、元はこの辺りにあったと記録が残る。しかし、江戸時代初めの1680年頃の「加茂条」の大火により賀茂神社は焼失し、加茂山(竜山)の山麓に遷座された。形は駒札形で黒塗りの枠縁で囲まれた中に、馬と人物が描かれている。馬は黒一色であるが、脚には曾我蕭白の特色ある描法が見られる。

ぬ意味

悠久の歴史の中に存在し続ける竜山には、朝露と太陽の光を背景に黄金色に輝きそそり立つ岩壁(屏風岩)が数多くある。

竜山は、春の山桜や秋にはウルシ(ハゼの木)の紅葉が緑と調和し、遠景は絵にも描けない美しさとなる。ハイキングでにぎわいを見せる山麓には紅葉が色づき始めており、深まりゆく秋が感じられます。柿の実も加わり、特上グラスの彩りを見せてくれるでしょう。



のじざく 陣墓と雷電



メモリアルパーク

高砂市清見町

の

は

快適なハイキング
高砂一の眺望だ！



誰が 呼んだか
でべそ山



“観瀆処”

父の愛情と景勝地

ふ



平成 17 年 撮影者：松川定男氏



の

野菊咲く

龍門坂を

生石へ

は

ハイキング

目指すは

へそ山
六号墳

ふ

風格と 流麗さ

分峯遺墨の

観瀆処

①の意味

加茂神社から生石神社へ行く道は、別名龍門坂と呼ばれた。県道392号は神社への参道である。道沿いに江戸時代に相模で活躍した力士龍門の家の白壁には「陣墓」の漆喰文字が浮き出ている。(平成23年に解体)

※陣墓の若き日の四段名は龍門と言う。陣墓は竜山の水道家出身で水道家達一友が島一高見山一龍門龍之助一龍門龍之助一陣墓島之助などと改名した。

②の意味

国史跡「石の宝殿」の南東にある「竜山」に加茂山、観瀆処または塩市・山条地区からの登山道がある。目指す6号墳は通称「でべそ山」と呼ばれた。頂上には、竜山6号墳のほかに魚崎橋居跡もある。又、新しい山条の登山道は登り口の樹叢に導かれ、山の神にお参りしてハイキング開始となる。道中には・壺の穴・目の瓦岩・ジャイアント馬場岩(だんご大石)・さざれ石風の竜山石・竜山の水窟(観瀆処と言う人もある)で権斎翁を見ながら魅力いっぱいの「でべそ山」へのハイキングを体験しよう。

③の意味

姫路藩の儒者 永根文峯の遺墨で19才の時に書いた三大文字“観瀆処”を 父佐石は藤生酒井氏が“眺望絶佳の地”として賞嘆していることから、親交があった河合寸翁に依頼し加茂山新屋の権斎翁を眺望できる場面に「留め、眺ね」まで精緻に刻ませている。これは地域の宝である。
跋文には
“親が子を想う気持ち”が彫られている。
※天保7年(1836年)に完成
※この新屋の周囲に大欠の痕跡があり探石遺跡の重要なポイントとなっている



魚崎構居跡(位田長兵衛の城の跡)



本丸



漲る力

秋祭り



中村五郎右衛門の碑

金時用水(水不足対策)



伏せ越し(逆サイホンのイメージ図)



ほ
本丸

位田長兵衛の

夢の址



み
漲る力で
神輿練る

氏子の熱気

秋祭り



み
水不足

救った

金時 宗五郎

ほ意味

巨石を切り出している砕石場である竜山南東部の頂上に平らかな場所があり、そこに「魚崎構居跡」の碑が建っている。この構居は戦国時代の神古城の出城で、城主は位田長兵衛であった。ここからは、「パノラマ風景」として、高砂・加古川等を一望できる。眼下には法華山谷川や加古川が龍の姿を呈し播磨灘へ流れるのが観望でき郷愁を誘う場所でもある。

み₂意味

毎年10月の3週目の土・日曜日に生石神社の秋季例祭が行われる。祭りのメインは「二基の神輿練り」だ。黄色と赤の鉢巻きを締め法被を着た若い衆が、大穴半運神(黄)と少名毘古那神(赤)に分かれて練り合う様は、浜手の祭りにひけをとらない。

※神輿の宮入り、鼓吹奏の演技、屋台の練り合わせ、竹割り、神事としての お面掛け、おばやし、遷御の儀、続いて神輿宮入れ、和太鼓、竹割、獅子舞、宮出し、が執り行われる。

み₁意味

魚崎村 今の伊保が干魃で疲弊していた竜山の下に井溝を掘って、木の笕を沈め、村を救済した。法華山谷川の下に石積み、トンネルをつくり導水する逆サイフォン(伏せ越し)を利用している。この水利事業が完成した後は、魚崎村・魚崎新村とも豊かな水を確保することができました。その後、村民達は安政四年(1857)に、竜山のもとに金時宗五郎・中村五郎右衛門の功績に感謝する碑を立てた。

山の奇岩

や



雨上がりの人面岩



竜山5号墳 前方後円墳

よ

横目で見る

わん
フン



雷神

ら

奉納 鬼虎魚



竜山山地の加茂神社 横

「山の神」の祠の一つ

や

山の周辺 奇岩
オプシエの
宝庫なり

よ

横目で見て
踏まらずに通る
鏡・玉・槍
出土あり

ら

雷神に
オコゼの干物
奉納し

④意味

竜山の周辺では、古墳時代から現代に至るまで、採石した形跡がみられる。

「石の宝庫及び竜山石採石遺跡」として、他の史跡群とともに国の史跡に一括指定された。(2014年10月6日指定)

竜山連山の採石跡を背景に風化状態、位置、などに季節の木々四季の風景が加わり、奇岩を引き立てている。それらを見つけながら周辺を散策するだけでも一日中楽しめる。

※不思議な模様、ゴリラ、ライオン、子犬、きつね、カッパ、獅子、仏さまの顔・人・動物の模様・幾何学模様・赤・青・黄の三色変化が複雑に組み込まれている場所。

⑤意味

米田町島の尾根上にある墳丘は4世紀後半ごろ築造された古墳で5号墳と名付けられている。鍵穴のような形をした日本独特な形式の前方後円墳で、1500年あまりの年月の風雨に耐えながらも自然崩壊が進んでいる。

昔は登山道が古墳の中央を通っていたが、今は古墳を迂回して史跡を守っている。登山家の気遣いが史跡を守っているのだ。

※発掘調査は1975年に行われ、養正館中央にある埋葬施設は壘穴式石室で流紋岩の扁平な割石に割竹形木棺が収められていた。発掘の成果として、鏡、ガラス玉、槍、鏃などが出土している。

⑥意味

オコゼは漢字で「鬼虎魚」と書き、顔かたちが奇怪で、背びれのとげには毒を持っている。山の神は女性で、自分より醜い魚を好み、機嫌の悪い時でもオコゼを差し出すと、静まったという言い伝えがある。

悪天候で山が荒れ、採石の危険なときには、山を静め、無事に山仕事ができるようにオコゼを供えていたと古者は語っています。

※加茂神社の横の「山の神」には、昭和の中頃まで山の神が怒れば、オコゼの干物を奉納して慰めていた。家にも山の神が住んでおり、悪妻家はいつもオコゼを忍ばせていたらしい。



「竜山採石場」 神社側から見る
※よ〜く見ると 人面・動物の顔が浮んで見える



竜山石製 国史跡の石碑(黄竜石)、おんびき、(赤竜石)、玉垣(青竜石)

石の宝殿研究会(愛称:石研くらぶ)とは

高砂市民の宝である石の宝殿と竜山周辺史跡の魅力を再発見し、高砂市内外にこれを伝承し、広めていくことを本会の目的とする会です。

令和2年度高砂市未来戦略推進事業